様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４０１

研究課題名（和文）国民国家確立期の〈民族精神〉による〈国民文学〉の創生――鴎外・樗牛・嘲風を中心に

研究課題名（英文）From the National Spirit to a National Literature : The Development of Japanese Literature in the Period of the Establishment of Japan as a National State, Focussing on Ogai, Chogyu and Chofu

研究代表者
林　正子（HAYASHI, Masako）

岐阜大学・地域科学部・教授

研究者番号：３０１９８８５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、森鴎外、高山樗牛、姉崎嘲風の論説を主な考察対象として、日清・日露戦争以降の国民国家確立期における日本の〈民族精神〉論が、ドイツ思想からの影響のもと〈国民文学〉を創出する実相を明らかにしている。具体的に、樗牛と嘲風のドイツ文明批評による日本文明論、樗牛と嘲風の評論に対する鴎外の批評を考察し、鴎外、樗牛、嘲風におけるドイツ思想・文化受容の意義を論じている。
　併せて、彼らの論説が掲載された当時の代表的総合雑誌「太陽」（博文館）について、「国民文学」創生に果たした雑誌メディアの意義についても論究している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　「国民国家」確立期の鴎外・樗牛・嘲風らによる論説を中心に、ドイツ思想・文化受容の意義を考察した著書『博文館「太陽」と近代日本文明論――ドイツ思想・文化の受容と展開』（勉誠出版）において、明治中期から大正中期までの長期にわたっての考察と、思想史・文学史における対象として「文明批評」を取り上げた研究であることが学術的に評価されている（長尾宗典氏による書評　「日本歴史」第847号　2018年12月号　吉川弘文館）。文明の進路や日本文化についての再考が進む現代において、明治・大正期の知識人が取り組んだ思想課題を振り返る際の手掛かりを提供することが、本研究成果の社会的意義として挙げられる。

研究成果の概要（英文）：This study shows that the essay on the Japanese spirit produced the national literature in the period of the establishment of Japan as a national state after the Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War under strong influence of German thought. The analysis of the criticism on Japanese civilization by TAKAYAMA Chogyu and ANESAKI Chofu as well as of MORI Ogais review of that works makes clear the significance of the reception of German thought and culture for Ogai, Chogyu and Chofu.
 Also, this study deals with the importance of the magazine “Taiyo” (The Sun) published by Hakubunkan in which Chogyu’s and Chofu’s criticism appeared for the birth of a national literature.

研究分野：日本近代文学

キーワード：森鴎外　高山樗牛　姉崎嘲風　国民国家　ドイツ思想文化受容　博文館「太陽」　文明批評　文化主義

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）本研究者は、これまで「明治末期から大正期にかけての日本文学におけるドイツ思想・文化受容の意義」、「明治文学の〈批評〉概念成立におけるドイツ美学受容の意義」、「近代日本の〈民族精神〉による〈国民文化〉の系譜――ドイツとの比較を視座として」、「近代日本の〈民間伝承〉による〈民族文化〉の創成――柳田國男のハイネ受容」といったテーマのもと、ドイツ思想・文化受容の観点から日本近代文学研究に臨み、「日清・日露戦役間の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面――総合雑誌「太陽」掲載の樗牛・嘲風・鷗外の言説を中心に」（「日本研究」第 15 集　国際日本文化研究センター　1996 年 12 月）をはじめとして、関連するテーマで 23 編の論考を発表してきた。日清戦争後から大正期にかけての日本におけるドイツ思想・文化論が、当時の知識人の意識や国情の実態を根源的に反映していることを明らかにする過程で、博文館発行の総合雑誌「太陽」掲載の論説・評論にとどまらず、鷗外の思想や文学観に多大の刺激を与えた樗牛と嘲風の論説における〈民族〉概念を、〈国家〉という単位での鷗外の自覚による〈文明〉の隆盛の提唱としてとらえ、これまで継続的に従事してきた鷗外研究を、樗牛・嘲風を媒介とすることで、近代日本における〈民族精神〉の文学化の軌跡を考究する必要性と重要性に考え至った。

（2）鷗外文学については汗牛充棟の膨大な先行研究があり、鷗外生誕 150 年、没後 90 年を記念しての 2012 年以降に限ってみても、『鷗外近代小説集』全 6 巻（岩波書店）の刊行、森鷗外記念會「鷗外」第 91 号「生誕 150 年記念号」発行、「文学」（岩波書店）第 14 巻第 1 号「特集森鷗外の諸相」をはじめとする数多くの研究成果が発表され、著書としても、井戸田総一郎『演劇場裏の詩人　森鷗外――若き日の演劇・劇場論を読む』（慶應義塾大学出版会）、山崎一穎『森鷗外　国家と作家の狭間で』（新日本出版社）、小堀桂一郎『森鷗外――日本はまだ普請中だ――』（ミネルヴァ書房）、小泉浩一郎『森鷗外の世界像』（翰林書房）、清田文武（編著）『森鷗外『舞姫』を読む』（勉誠出版）、鷗外研究会（編）『森鷗外と美術』（双文社出版）など、とくに鷗外研究の重鎮による単行本の刊行が相次いだ。

樗牛研究については、2010 年以降、理崎 啓『青年の国のオリオン　明治日本と高山樗牛』（哲山堂）、先崎彰容『個人主義から〈自分らしさ〉へ――福沢諭吉・高山樗牛・和辻哲郎の「近代」体験――』（東北大学出版会）、同『高山樗牛――美とナショナリズム』（論創社）、花澤哲文『高山樗牛　歴史をめぐる芸術と論争』（翰林書房）をはじめ、近代日本思想史の分野における成果が続いている。

また、姉崎正治（嘲風）については、磯前順一・深沢英隆（編）『近代日本における知識人と宗教――姉崎正治の軌跡』（東京堂出版）が、宗教学者・文筆家としての姉崎の業績のみならず、国体論と民本主義、ナショナリズムと自由主義の渦中に生きた、国際派知識人、貴族院議員としての姉崎の人生行路と業績の全容を明らかにしている。

このように、鷗外・樗牛・嘲風についての個別の先行研究は充実しているが、三者相互の切磋琢磨による成果を勘案しての、国民国家確立期の日本における〈民族精神〉論と〈国民文化〉論の具体的内容や、〈国民文学〉を希求する思想や実作について論究することが、今後の課題として認識されていた。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀から 20 世紀にかけて受容されたドイツ思想・文化を媒介として、森鷗外、高山樗牛、姉崎嘲風ら近代日本の知識人たちが、「国民国家」確立期における「国民文化」構築の重要性について認識し、その発展に寄与していった内実をたどることである。すなわち、当時の国情や鷗外、樗牛、嘲風ら知識人の意識が、近代日本におけるドイツ思想・文化受容とその表現形態や発展の軌跡に反映すると同時に、ドイツ思想・文化受容の成果そのものが、「国民精神」の基盤を構築することによって、相互の響き合いによる「国民文化」の価値創造を実現させたことを浮き彫りにすることを目的としている。

３．研究の方法

(1)「研究の目的」を遂行するにあたって、当時の代表的総合雑誌「太陽」（博文館）に掲載された論説をおもな考察対象とする。明治 28（1895）年 1 月創刊号の発行部数が 285,000 部と言われ、以後 10 年以上にわたって毎号約 100,000 部という破格の発行部数を誇った当時の代表的総合雑誌「太陽」は、「国民文化」創成において読者にも圧倒的な影響を及ぼさずにおかなかったと考えられるからである。

（2）博文館「太陽」誌上における樗牛と嘲風の評論活動を時系列的にたどる。「太陽」が明治国家権力の歴史的・階級的性格の形成期における思想・文化の動向・思潮を映し出すスクリーンの役割を担っていたことを指摘し、ショーペンハウアーやニーチェを中心とするドイツの思想・文化の内容がどのように理解され論じられていたか、その受容のあり方が、当代の日本の時代状況や知識人の精神性をどのように反映しているか、といった観点から、「太陽」に掲載された樗牛と嘲風の文明批評を取り上げる。

（3）樗牛、嘲風、鷗外の文明評論を取り上げるとともに、三者の間の論争および批評上の応答関係を追尋する。具体的には、樗牛と鷗外の審美学論争、嘲風の「洋行無用」論への鷗外の反駁など、樗牛・嘲風との切磋琢磨による鷗外の文学活動の成果として、日清・日露戦争期の日本文学におけるドイツ思想・文化受容の意義を論じる。

（4）鷗外、樗牛、嘲風に加えて、金子筑水のドイツ思想・文化受容と近代日本精神論および「両性問題」論、桑木嚴翼の「文化主義」についての考察もおこない、明治期の思想界における「文明」概念の発生と展開、そこから「文化」概念が分立し、大正期に「文化主義」が提唱されるにいたる過程で、ドイツ由来の「生の哲学」「新理想主義」が果たした役割を指摘する。

４．研究成果

（1）本研究をとおして、学位論文『博文館「太陽」と近代日本文明論――ドイツ思想・文化の受容と展開』（勉誠出版　2017 年　A5 版　全 519 頁）をまとめることできた。博乙第 4502 号博士（文学）（岡山大学）。以下は、その研究成果の概要である。

（2）破格の発行部数を誇る博文館「太陽」に、ドイツ思想・文化受容の成果が掲載されたことで、自己の存在意義を模索する数多くの読者に、具体的なドイツ思想・文化に関する情報を与え、関心を喚起させたこと、さらにその知識によって自らドイツ思想・文化について論じさせ、そこから相対的・客観的な日本文化論を展開することによって、博文館「太陽」は日本の国情への、自己自身への認識を深めさせるというパラダイムを創り上げ、当時の時代精神そのものを形成していったことを明らかにした。

（3）樗牛や嘲風ら、当時の国民国家の方向性に「懐疑」を寄せることになった、明治維新後の生まれである青年たちにとって、俗化の方向をたどる文明の改革と主体性のない社会の道徳への反抗を実現する拠り所の意味をもっていたこと、また、当時の青年知識人たちにとって、樗牛や嘲風がドイツ思想・文化に依拠して展開した個人主義＝主観主義は、「個人の意志の力」を信奉するうえでの強力なバック・ボーンとなったことを明らかにした。

（4）鷗外におけるルドルフ・オイケン受容のあり方には、人間の本能や欲望を赤裸々に描写する自然主義に対しての鷗外の問題意識が投影しているだけでなく、「精神的生」の積極的な意義を説くオイケンの「新理想主義」から、鷗外は宗教の必要性を論じるうえで大いなる示唆を受けたこと、近代日本において「文明」から「文化」が自立してゆくプロセスで、オイケンの提唱する「精神生活」の尊重の思想が多大の影響を及ぼして、「文化」概念を確定したことを明らかにした。

（5）明治中後期から大正期にかけて、樗牛、嘲風、鷗外、金子筑水、桑木嚴翼ら時代のオピニオンリーダーとなったドイツ系知識人が、ショーペンハウアー、ハルトマン、ニーチェ、ヴァーグナー、オイケンらのドイツ哲学を受容しつつ、日本文明論などの批評活動を展開していった過程を跡付けることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 林　正子　「書評　美留町義雄『軍服を脱いだ鷗外――青年森林太郎のミュンヘン』（大修館書店　2018 年 7 月）」　「比較文学」第 61 巻　2018 年度　査読無　2019 年　158～165 頁

② 林　正子　「森鷗外の日本」　「中日新聞」（夕刊）　査読無　2018 年 12 月 14 日（金）、12 月 21 日（金）、12 月 28 日（金）

〔学会発表〕（計 7 件）

① 林　正子　「〈日本のハイネ〉としての田岡嶺雲」　第 42 回ハイネ逍遥の会　2019 年 2 月 23 日（土）　名古屋国際センター（愛知県、名古屋市）

② 林　正子　「森鷗外の『花子』――岐阜ゆかりの女優の活躍」　岐阜県図書館講座　2018 年 8 月 5 日（日）　岐阜県図書館（岐阜県、岐阜市）

③ 林　正子　「明治 150 年、森鷗外の〈心の飢〉の豊かさ」　岐阜県私学高等学校保護者連合会　2018 年 6 月 6 日（水）　十八楼（岐阜県、岐阜市）

④ 林　正子　「森鷗外のハイネ受容――「文化」概念と「文化主義」」　第 39 回ハイネ逍遥の会　2018 年 2 月 24 日（土）　名古屋国際センター（愛知県、名古屋市）

⑤ 林　正子　「森鷗外の「文化」概念と近代日本の「文化主義」」　日本比較文学会第 43 回中部大会シンポジウム「文化主義者の美学――鷗外、烏水、荷風による欧米受容と文化の創出」　2017 年 12 月 2 日（土）　名古屋大学（愛知県、名古屋市）

⑥ 林　正子　「〈エクソフォニー小説〉としての『舞姫』――実体験の〈翻訳〉という創作の力」　日本比較文学会第 79 回全国大会シンポジウム「森鷗外と多和田葉子――日独越境者の言語意識と文化受容」　2017 年 6 月 18 日（日）　山形大学（山形県、山形市）

⑦ 林　正子　「高山樗牛におけるハイネ受容――国民国家確立期の〈個人主義〉」　日本比較文学会第 40 回中部大会　2016 年 5 月 14 日（土）　名古屋大学（愛知県、名古屋市）

〔図書〕（計 2 件）

① 『ドイツ哲学・思想事典』　ミネルヴァ書房　2020 年 6 月刊行予定　林　正子　執筆担当「ルドルフ・オイケン」

② 林　正子　勉誠出版　『博文館「太陽」と近代日本文明論――ドイツ思想・文化の受容と展開』　2017 年　全 519 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　　該当なし

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：　　該当なし
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：　　該当なし
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。